今月のことば　令和5年（2022）6月　<No.202>

真宗のコンプレックス

今年一月に発布された「新しい領解文」。その内容や成立過程に疑義を申し立てる学者の方々が記者会見を開き、各種新聞に取り上げられるなど大きな騒動に発展しています。

真光寺でも４月の「今月のことば」で取り上げましたが、**住職は「反対」の立場です。「執われの心を 離れます」「むさぼり いかりに 流されず」といった道徳観が、まるで救いの条件のように述べられているのが一つの理由です。**どうしてこのような文書が発布されたのか…？そこには「救いは本願念仏一つ」とうたう真宗の者が持つ“コンプレックス”が背景にあるのではないかと思います。大谷大学学長を務めた故・廣瀬杲先生のことばから考えていきます。

宗教を倫理的な、道徳的な関心の中へ取り込んでいくと、かならず誤るのです。…

往生浄土の道といっても、やはり仏道だ。仏道であるかぎり大乗菩薩道（住職註；世のため人のため、生きとし生けるものを救うためにはたらく）でなくてはいけない。大乗菩薩道でなくてはいけないということになりますと、親鸞聖人の教えも大乗菩薩道だということをなんとか言わなくてはいけないという意識が起こってくるのです。**もしそういう思いが私たちの中にあるといたしますと、それはコンプレックスだと思います。…もっとはっきりとした言葉にしていかないと、親鸞聖人の教えが現代人の中で疎外されていくのではないだろうかという不安感があるのです。**

…あの人はまじめだ、あるいは私もまじめに生きていると言ったとき、案外そのまじめという根っこがなんであるかと尋ねてみると、ときによると高慢心であるかもしれません。「自分はまじめに生きている」とひと言言ったときに、「ほかの人は不まじめだ」という言葉がつい出てきますから、それはひょっとするとどころではなく、はっきり高慢な心が根本にあるのです。…もっときついことを申しますと、功利心です。自分が得するという心が根っこにあって、まじめという生活表現になっているということがあるわけです。

『歎異抄講話4』　廣瀬杲 著 より

「役に立つか立たないか」「倫理的に正しいか否か」で評価が決まってしまう現代社会において、「浄土真宗も社会の役に立っています・誠実にやっています」と表明したくなる本山（本願寺）の方々の気持ちは理解できます。しかし、たとえ菩薩道を生きたいという願いを持っていても、その通りに生きられない、それを24時間・ひとときも忘れず実践することなどできないのが、私たちの命です。親鸞聖人は、そうした人間のありさまを「煩悩具足の凡夫」と言われました。

煩悩しかないのが人間（私）です。「願いを叶えたい、もっと好きなことをやっていたい、病気にはかかりたくない、穏やかな心で暮らしていきたい、大切な家族を守りたい…。**自分勝手と思いながらも、正直なところ私（住職自身）からそれを取ったらあとは何も残りません。しかし逆に言えば、煩悩具足でしか生きられない私の命であるからこそ、阿弥陀様のお救いに遇うことができるのだと、親鸞聖人は示してくださったのです。**

慧日山 真光寺